西田哲学会会報

第二号

題字　上田閑照

発行・西田哲学会事務局
〒九二九―一一二六
石川県かほく市内日角一番地
石川県西田幾多郎記念哲学館内
電話（〇七六）二八三―六六〇〇

第二回年次大会報告

西田哲学会の第二回年次大会が、平成十六年七月二十四日（土）、二十五日（日）の両日にわたり、上智大学四ツ谷キャンパス（東京都新宿区）で開催された。猛暑のなかにもかかわらず、両日でのべ二百五十名ほどの多数の参加をみた。

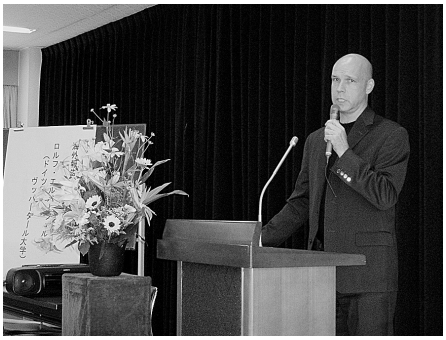
二十四日の午前の部は、一般向けのプレカンファレンスが二会場に分かれて開かれた。「講読部門」では『善の研究』の勉強会が、「自由茶話会部門」では「哲学サロン」として西田哲学に話題を限定せず自由な討論が行われた。

午後の部では松丸壽雄氏（獨協大）「西田哲学と科学―純粋経験を視野に入れながら」と、八木誠一氏（桐蔭横浜大）「言語・自我・直接経験」の二つの講演が行われた。松丸氏は数学の集合論と西田の場所論との関係を指摘。八木氏はイメージを介した通常の「間接体験」を消去したところに現れる「直接経験」について自説を展開。

終了後開かれた懇親会では、西田幾多郎の孫にあたられる西田幾久彦氏が思い出話を語られた。

二十五日の午前の部では、三人の若手研究者による研究発表が行われた。杉本耕一氏（京都大）「西田哲学における歴史と歴史を越えるもの―「絶対矛盾的自己同一」概念の分析を手掛りとして」は、従来看過されがちであった西田哲学における「歴史的なるもの」を追究。村田康常氏（立教大）「実在の論理―西田とホワイトヘッド」は、西田の場所論とホワイトヘッドのプロセス論とを比較。ゲレオン・コプフ氏（南山大）「平常心と平常底とのあいだ―西田哲学における仏教解釈」は、「即非の論理」や「平常底」などの概念と仏教思想との異同について論じた。

午後の部ではロルフ・エルバーフェルト氏（ドイツ・ヴッパータール大学）による海外報告がなされた。西洋の現代音楽に与えた西田哲学の影響をCDを聴かせながら紹介したが、新鮮な話題に大きな反響があった。

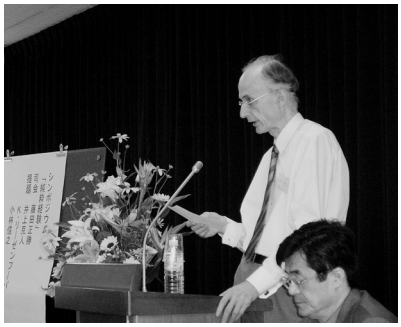


海外報告：ロルフ・エルバーフェルト氏

その後、今大会のテーマである「純粋経験」に関するシンポジウムが藤田正勝氏（京都大）の司会により行われた。哲学の立場から井上克人氏（関西大）、宗教学の立場からクラウス・リーゼンフーバー氏（上智大）、美学・芸術学の立場から小林信之氏（京都市立芸大）がそれぞれ提題者として発表した。井上氏は「純粋経験」に見られる「内在的超越」の構造を、「体」と「用」、発展と還帰、露顕と覆蔵といった対概念を駆使して解明。リーゼンフーバー氏は「純粋経験」のもつ全体的・能動的・含蓄的・無限的性格を指摘し、そこに現れる哲学と宗教との差異を検討。小林氏は「純粋経験」の純粋性はつねに自らを否定する不純や混濁と不可分であり、そのことが西田哲学にダイナミズムをもたらしたと主張。そし

シンポジウム

提題者：井上克人氏


提題者：クラウス・リーゼンフーバー氏

提題者：小林信之氏

てフォルムの純粋性を説くモダニズムを批判した画家カシミル・マレーヴィチと西田との類似性を指摘。

今回「純粋経験」がテーマであったが、結局それが言語を超えたものか否かという点に多くの議論が集中したように思われる。これは西田解釈のかなめになるところであり、今後の大会においても形を変えながら問題にされていくであろう。なお、東京での大会開催を危ぶむむきもあったが、盛況のうちに終わることができ、全国規模での学会の展開に会員一同大きな自信をえたのではなかろうか。

（文責・田中久文）

理事会報告

平成十六年七月二十四日（土）十二時半より、上智大学七号館において西田哲学会理事会が開催されました。まず、（一）会計監査と予算案が承認され、（二）その上で学会事務センターへの委託業務についても検討されました。この件については、別にお知らせが届きます。その他に議題とされたのは、（三）西田幾多郎記念哲学館（かほく市）とのつながり、（四）賛助会員規定、（五）特別会員の講演料、（六）編集委員会報告などです。西田哲学会第三回年次大会は、平成十七年七月二十三日（土）、二十四日（日）に、石川県かほく市の西田幾多郎記念哲学館で開催されることも決定され、テーマは幹事会で検討中です。

（文責・米山　優）

「学会事務センター」の破産について

「㈶日本学会事務センター」の破産については、皆さんには、この件に関わる文書をお送りします。年会費の振込先が変更となりますことなど、重要な変更がございますので、くれぐれもよくお読みいただけるようお願い申し上げます。

（文責・米山　優）

エッセイ

私の愉しみ

山田敬子

「西田哲学は面白い」と若い頃の友人にいったら「あんな難しいものどこが？」といわれた。そこで「難しいから面白い」と応えたら「あなた変わっているのね」といわれてしまった。そこで西田哲学が私に魅力を感じさせるものは何かを考えてみようと思う。

今年、四月から十回シリーズで西田の論文「論理と生命」、「直接に与えられるもの」などを読む講座に参加した。これらの論文は確かに難解である。しかし繰り返し読んでいくと、大枠で存在論と認識論にまとめることができると思う。その中には自然論、生命論、技術論、言語論、身体論といった現代に通じる多岐にわたる問題のヒントが潜んでおり、知的好奇心が駆り立てられる思いがしている。

さらに、八月に開催された石川県西田哲学館の夏期講座では、私にとって新しい発見があった。それは、一般の人々から呪文のようだといわれている『絶対矛盾的自己同一』についての発見である。それは生死を同時にかかえている「生命」が『絶対矛盾的自己同一』のモデルとして具体的に示されているということ、そして西田哲学のアプローチの仕方の一つに「生命論」があるということ、また「自覚における直観と反省」の「直観」を主客未分（不断進行の意識）＝時間（存在）とみて、「反省」をひるがえってこれを見た意識＝空間（過去・現在・未来を含む場）とみる考え方、これらを岡田勝明先生より教えていただいて深く感銘し、同時に溜飲が下がる思いがした。つづいて大橋良介先生は講演「都市の生と死」において次のようなことをいわれた。それは、「人間が求める理想の生活空間は如何に」の問いに対して、現代人の都市づくりに対する考えの基盤は合理性・能率性を重んじたものであるが、しかしそこには歴史が示すように繁栄（生）と表裏の道徳的腐敗（廃墟＝死）がみられる。この合理性のみ強調された「人工都市」は、やすらぎはおろか生命の死さえも感じさせる。これに関して、ハイデッガーが講演「なぜわれわれは田舎にとどまるのか」の中で深く洞察しており、「都市」が失ったものは何かを参照することができるということであった。このことは自己自身の矛盾に満ちた欲求と如何に付き合うかという問いが投げかけられているように思った。

以上からもわかるように西田を読みはじめると同時進行で他の哲学者の考えが知りたくなる。そしてさらに宗教的思想や仏典に触れることによって西田哲学との接点や関連など探し求めてみたい。このように興味が次々に湧いてくるのである。

（二〇〇四―八―二七）

自己が自己（の中の地図）において自己を知る

大西光弘

私は西田の「場所」に、清水博氏の「場所」解釈を通じて出会った。清水の「場所」は、西田の「有の場所」と「自覚」という考えを独自に発展させたものだ。西田哲学が潜在的に含んでいる豊かな可能性を示す好例と思うので、簡単に紹介してみる。

1、「位置（場所）の情報」

たとえばトカゲの尻尾は切られても再生する。その切断面にある細胞の立場になって考えてみよう。今まで体内にあって内臓や血管を作っていた細胞が、急に外気にさらされ、皮膚を作る細胞にならねばならない。今まで思いもよらなかった役割を、状況の変化に応じて細胞は果たさねばならないのだ。ということは細胞は、自分が体内でどの様な位置と状況にあるかについての情報（これを「位置の情報」という）を持っていることになる。

2、「自己が自己（の中の地図）において自己を見る」

つまり細胞は、（一）自分がその中に存在している全体の地図を自分の中に持っており、（二）さらにその地図の中に自分を位置づけて、（三）その位置での自分の果たすべき役割を推し量っている、はずなのだ。個体が自分の中の地図に自分の場所を位置づけることを、清水は「（場所的）自己言及」と呼ぶ。これは西田による「自覚」の定式「自己が自己において自己を見る」の「自己において」を、「自己（の中の地図）において」と解釈して発展させたものだ。細胞に限らない。犬なども、飼い主一家のメンバーの地位関係の地図を自分の中に持ち、その中での自分の位置を知りつつ振舞っているようだし、人間関係に悩む我々人間においては何をか言わんや。（場所的）自己言及は、生物すべてに共通の性質なのだ。

個体が自己の中に持っている全体の地図のことを清水は「内部場所」「場」などと呼ぶ。そして個体がその中に実際にいる環境を「外部場所」「実場所」「場所」と呼んでいる。

3、「矛盾的自己同一はどうやって成立するか」

「外部場所」（西田の「有の場所」「全一」）から、個体達（個多）へ、位置の情報がフィードバックされる。それを参考にして個体は、自分の「内部場所」の地図を改訂したり、その中の自分の位置づけを微調整したりする。その場所的な自己理解をもとにして、個体達はしかるべき役割を果たして行動する。その結果、個体達が集って成立している場所全体の姿も変化する。そうやって変化した場所からは、当然変化した位置の情報が個体達へフィードバックされ、それを参考にして個体は……というサイクルが回ることで、できるだけ多様な（「矛盾」さえする）個体達が集りながらも、場所全体としては「自己同一」を保った姿で成長するという、「矛盾的自己同一」の状態が達成される。清水の研究は、生物学の領域で「矛盾的自己同一」が成立する過程を具体的に考察した独特の試みである。

とかく抽象論に陥りがちな我々哲学屋は、具体的場面で研究を展開する清水のタッチを大いに参考にすべきだろう。また清水には、「有の場所」を中心にした従来の研究に、「無の場所」（自らは無にして姿を現さないが個多を多様な個多たらしめるｍａｔｒｉｘ。最近の彼の言う「純粋生命」はこの方向か）なども取り入れた研究の一層の深化を望んでやまない。

「西田哲学研究会」のご案内

・西田哲学研究会［於京都］

四十年を超える月日を継続して積み重ねられてきた、京都における西田哲学の研究会です。毎回西田先生の著作を少しずつ読んでいます。次回は十一月二十八日（日）、京大会館にて行われます。全集第十一巻所収の「予定調和を手引きとして宗教哲学へ」を取り上げます。長く研究者だけで続けられていましたが、西田哲学会の発足以来、会員の方にも門戸を開いています。

・西田哲学研究会［於東京］

「西田哲学研究会」は若干、組織の変更があり、今年度後期からは隔月開催になりました。十一月の開催日は未定です。前々回から論文「場所」を輪読しています。関心のある方は下記の事務局までご連絡ください。開催日時、開催場所、テキストを毎回お知らせいたします。

〒一六七―〇〇五一
東京都杉並区荻窪
四―二五―一一―七〇一
西田哲学研究会事務局
nishidaphi@mx9.ttcn.ne.jp

アンケートの結果について

第二回年次大会でご協力をお願いしましたアンケートの結果を簡単にご報告いたします。お配りした総数は百を越えていたはずですが、回答数は二十八でした。回答者は研究者でない方が多数でした。（一）西田哲学会会報に載せたらいいと思う記事については、「研究論文、著作物一覧」、「各分野の受容者からの報告」、「一般の方が西田のどこに惹かれたかを述べた記事」、「西田の思想との具体的な出会いの経験」、「西田の主要著作に関する簡単な解説」、「西田哲学を生活に生かす工夫」などといった記述があり、編集委員会としても検討中です。また「海外での西田研究の書評あるいは翻訳」という要望もありましたが、これは会報ではなく年報の方にふさわしいと編集委員長としては判断しております。また、「一般の方が西田のどこに惹かれたかを述べたもの」というご要望については、今回のアンケートでお応えいただいた方々がいらっしゃいますので、エッセイを書いていただくなどという形で次々に紹介するのも一つの方策かと考えております。また（二）「心に残った西田の言葉」という問いには、予想されたことではありますが、「絶対矛盾的自己同一」が最多の回答数でした。（三）西田哲学会への意見・希望・批判に関しては、「投稿論文は、外国語の summary は

いらないと思う」という意見もありましたが、これは学会誌として世間に認められるための最低条件に今ではなってしまっているように思われ、削除不可能です。その他、多くの貴重なご意見をいただきました。ご協力いただいた皆様に、ここで改めて御礼申し上げます。と同時に紙面の都合上この程度の簡単な報告に留めましたことをお詫び申し上げます。

（文責・米山　優）

Webサイトについて

西田哲学会のWebサイトのアドレスが、有坂先生の手を離れ、七月五日以降、次のものとなりました。

http://www.nishida-philosophy.org/

サイトの更新は会報などの発行よりもずっと頻繁に行えますので、最新の情報を取得するためにはこのWebサイトにアクセスしていただけると幸いです。入会申込書もダウンロードできます。

（文責・米山　優）

西田哲学会年報の配付（誤配）について

規定ではA会員は「会報」を受け取ることができ、「年報」は受け取れないことになっております。ところが西田哲学会年報の創刊号がA会員の皆様にも、今回は、届いたことと思います。手違いです。申し訳ありません。しかしながら、今回はそのままご笑納下さい。B会員となれば、このような年報を受け取れるということを知っていただく良い機会にはなったと思います。是非ともお読みいただき、参考にしていただければ幸いに存じます。

（文責・米山　優）

第三回年次大会について

理事会報告のところでも触れましたように、西田哲学会第三回年次大会は、平成十七年七月二十三日（土）、二十四日（日）に、石川県かほく市の西田幾多郎記念哲学館で開催されます。

（文責・米山　優）

年次大会における発表者の公募について

西田哲学会では、年次大会における発表者の決定についてのルールが決まっておりませんでした。そこで、この度、発表者を公募するという方針をお知らせいたしますと共に、その要領を以下のようにいたします。

発表なさりたい題目に関する簡単な要約を八百字前後でお書きいただき、三月末までに西田哲学会事務局までお送り下さい。審査を経て、採用された場合に年次大会における発表者となっていただくことになります。

（文責・米山　優）

『西田哲学会年報』掲載論文の公募について

当学会の機関誌『西田哲学会年報』に掲載する論文を募集しております。論文を投稿しようとする会員は、次の要領で応募してください。内容的には西田との関係に言及があれば、京都学派の他の哲学者あるいは西洋の哲学者などについての論考でも構いません。

1．応募資格

本会B会員またはC会員であれば誰でも応募できます。

2．応募方法

原稿は四百字詰め原稿用紙に換算して四十枚以内（文献・注を含む）が原則。四十枚を越える場合は、五十枚を限度として、その超過分の実費をいただきます。原稿五部と二百語程度の欧文要旨（英・独・仏のいずれか）五部を提出して下さい。原稿にも、氏名、ふりがな、可能ならば所属機関を明記して下さい。

提出原稿は、可能な限りフロッピーディスクか電子メールで入稿することが望ましい。また、原稿ファイルは、ワープロ用のファイルとテキストファイルの二種類で提出して下さい。ファイルと同時に、使用OSとソフト名を必ず知らせて下さい。

郵送の場合は、封筒の表に「公募論文原稿在中」と明記して下さい。

応募した原稿およびフロッピーディスクは返却しません。

なお将来的にCD－ROMへの収録、Webサイトへのアップを御承認下さい。

3．応募締切

随時提出することができます。

4．審査

編集委員会の責任において審査・選考します。審査の過程で問題点を応募者に指摘し、書き直しの要求をする場合があります。

5．投稿の際には、下記の事項を明記した紙を添付して下さい。

1）氏名（欧文氏名も）

2）所属（○○大学文学部教授、○○大学大学院文学研究科大学院生などのように、詳細に記して下さい）

3）論文名（欧文題名も）

4）連絡先

・郵便物の送付先（自宅住所あるいは勤務先住所）

・電話やFAXによる連絡先（自宅あるいは勤務先）

・電子メールアドレス

6．原稿の送り先および連絡先

〒九二九－一一二六
石川県かほく市内日角一番地
石川県西田幾多郎
記念哲学館内
西田哲学会事務局
TEL（〇七六）二八三－六六〇〇
FAX（〇七六）二八三－六三二〇

編集後記

西田哲学会会報第二号をお届けします。創刊号とあまり変わらない紙面となりましたが、年次大会の折に御回答いただいたアンケートなどを参考にしてより良いものにしていきたいと思います。会員にお知らせするにふさわしい記事などございましたら、現在の編集委員長米山優（yoneyama@sannet.ne.jp）まで、随時ご提案いただければ幸いです。

学会事務センターの破産などといった事件はありましたが、西田哲学会はこれまでと同じように、あるいはさらに活発に、動いていけると確信しております。何卒ご協力をよろしくお願いいたします。

なお、エッセイの筆者、山田敬子さんは市邨学園短期大学名誉教授、大西光弘さんは立命館大学非常勤講師です。

（米山　優）